



Title	出土『日書』と先秦数術家の世界観〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	何, 松延
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16481号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94858
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Songyan_He_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 何 松 延

主査 教授 近 藤 浩 之
審査委員 副査 教授 弐 和 順
副査 教授 吉 開 将 人

学位論文題名

出土『日書』と先秦数術家の世界観

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文では、出土『日書』にそれぞれ地域性・時代性・学派性・階層性といった各種の性格（個人性、個別性）を有することに注意して分析し、『日書』のいくつかの篇の性格を明らかにし、各種の同一篇（「盗者」篇など）や類似篇（「直室門」篇など）の内容と占法を解明しつつ、その流通地域の社会風習・祭祀慣習や所有者の階層などの特徴について考察し、ついには、先秦から漢代にかけて、社会構造の変化に伴って儀礼の対象や実施者が変化・変遷し、全体的に世俗化する傾向があることを明らかにすることに成功している。そして、『日書』各種各篇に反映され、それを運用する陰陽家・数術家がおもい描く世界観の変遷という思想史的な問題に対する一つの論点、すなわち『日書』では多層的吉凶判断を設けて人間の全ての活動は数理に従って行うべきことを提唱しており、その数理或いは天数は善悪なしで常に運行して吉凶を生じ、人間は「趨吉避凶」の原則によって活動する。」という論点を提起する。とりわけ以下の四点を、『日書』研究における新しくユニークな観点と方法によるものとして高く評価できる。

①睡虎地秦簡『日書』と放馬灘秦簡『日書』、孔家坡漢簡『日書』とで共通する「盗者」篇を軸として出土『日書』の対照方法による分析を試みて、『日書』が個人的資料として墓主によって添削・修正されることがあり、その個人性・個別性に留意して論じる必要性を明らかにしたこと。

②門を主題として類似する各種の占術を検討し、孤虚の門における煞気の考察や一年の陰陽変化を表す刑徳の門の考察を通じて、その数理或いは天数は善悪なしで常に運行して吉凶を生じるのであり、人間の活動はその数理に従うべきであるという世界観がうかがえることを指摘したこと。

③初期的な卦氣説は戦国末期の馬王堆漢墓帛書易傳に見られるが、その内容は、乾坤（「二三子問」篇）や損益（「要」篇）の徳を提唱するものでそれらを吉凶の門とする。易学の卦氣説は、数術学の刑徳から陰陽消息を具体的に表現する発想（啓発）は受けたが、ただしそれは直接的伝授関係ではない、というような易学と数術学との関連性を（区別して）指摘したこと。（学界では「術数」と「方技」との区別が議論されることがあるが、易の「象数」と「数術」との区別という重要な論点にも関わる。）

④対抗儀礼を軸として、戦国中期の卜筮祭禱簡と戦国末期の『日書』詰篇などや『五十二病方』とを比較して、その呪術・宗教観を考察し、時代的に社会構造の変化に伴って儀礼の対象や実施者が変化し、全体的に世俗化する傾向が見られ、専門的巫祝・貞人でない一般人でも数術の理論と手段によって祟災の原因（鬼神）を撃退できると考えるようになる、という宗教的世界観の変化を指摘したこと。

なお、第二章は「睡虎地秦簡『盗者』篇の文獻的性格について」と題して『中国哲学』第51号（北海道大学中国哲学会、2024年）に、第四章は「馬王堆漢墓帛書易傳における卦氣説」と題して『中国哲学』第49号（北海道大学中国哲学会、2022年）に掲載済みであり、すでに一定の評価を得ている。また、第三章は「出土『日書』の占法における門の数術的意義」と題して『北海道大学文学院研究論集』（北海道大学大学院文学院、2025年）に、第五章は「先秦期の対抗儀禮より見た呪術と巫の變遷—出土『日書』と卜筮祭禱簡を比較して」と題して『中国哲学』第52号に掲載予定である。因みに、日本中国学会第76回大会で行った研究発表「随州孔家坡漢簡『日

書』「歳」篇における数術家的特徴」(二松学舎大学、2024 年 10 月 12 日) は、第三～五章に関連する内容である。ほかの序章、第一章、終章は書き下ろしである。

・学位授与に関する委員会の所見

審査の過程において、先行研究の到達点及び問題点と、筆者が何を何処まで明らかにできたのかとの関連性がわかりにくいこと、参考文献の示し方に統一性がなく引用文献の略称の使用に関する説明が不十分であること、推測が多くなりがちな出土資料による論証の妥当性を、方法論の議論のみでなく具体的実証的な事例・実例で確保する工夫が十分でないこと等の指摘がなされた。ただし、これらの問題点はほぼ容易に修正し得るものと、出土資料の限界でこれ以上致し方のないものとがあり、むしろ今後の発展を期待でき、本論文の成果と価値を本質的に損なうものではない。『日書』及び数術学研究の新しい方向性を示すような成果であることに変わりはない。

以上に基づき本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究成果を高く評価し、全員一致で本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。